

## 言語・辞書の「鏡」に見る日本・中国の 国情・心性・文化の諸相と異同（序説 1）

夏 剛

筆者は日・中間の文化・社会等の様々な異同（相違と共通・類似）を探究して来たが、2013年度の学外研究では長年の蓄積の集大成の一環として、「中国語の奥義・日本語の機微——両言語及び両国文化の表現様式・思考回路の比較」に取り組んだ。其の結果、当該主題の下で関連しつつも別々の視座・切り口・材料乃至論説の体裁を用いて、独立する3つの系列論考の原稿（合計約60万字）を書き上げた。11年半振りの貴重な専念期間（前回は半年）を与えてくれた勤務先及び社会への還元として、期間中から成果の確定分を先ず本誌で公表を始めた。其々連載の形を取る系列論考の最初の部分として、「中、日之间及各自内部的“语沟・语通”、“语缘・语环”诸相纵论（1）」（中国語使用。題の日本語訳＝「日中間及び両国内部の言語の相関・相違と相生・相克の位相・諸相」）を第26巻2号に、「中国的な“鮮烈”と日本的な“円やか”——両国の言語・文化の特質の一端（1）」を同4号に掲載した（13年10月、14年3月刊）。続いて集中的に推敲・加筆中の3作目を順次発表して行く予定であるが、本論考は可成異色な実験作なので独創的な方法や意欲的な追求に就いて説明して置きたい。

筆者は「中国、中華民族、中国人の国家観念・民族意識・“国民自覚”」（共著『ナショナル・アイデンティティ論の現在——現代世界を読み解くために』[晃洋書房、2003年]第6章）を初め、両国の権威有る国語辞書に見る概念・表現等の異同を分析する手法を使って来た。一方、「儒商・徳治”の道——理・礼・力・利を軸とする中国政治の伝統文化（1～3）」（本誌14巻4号、15巻1号、同2号[02年3月、6月、10月]）等、中国政治や国際関係に就いても指導原理や要人の言説・素質等を巡る論考を多く発表している。両言語・文化の特質の一端を提示する「中国的な“鮮烈”と日本的な“円やか”」は、専ら国語辞書の説明・典拠等から字・義の異同や言葉の源流及び相互影響を突き止めて、学問的な検証と客観的な解釈に由って両者の姿を浮彫にし本質を掘り下げるものであるが、本論考では言葉の使用頻度や今に生きる用例にも光を当てて、国語辞書を一種の鏡にして伝統、世相や時代精神を捉え、其処から言葉に対する逆照射・再検討を試みる。又、「中国的な“鮮烈”と日本的な“円やか”」の冒頭に掲げた2人

の華人識者の見解に即して、言語の研究、文化の比較と共に社会考察・時事評論・政治談義にも大きな比重を置くことにした。

其の「日本人には個人の自立が足りない」(アグネス・チャン)と「中国人は実は博奕ち政治が大好き」(邱永漢)から、両言語の意思表示・自己主張の流儀や中国の政治大国・「商人国家」の側面を改めて考えさせられた。本論考では契機と為る上記論考の最初の10段落を変則的に導入部とし、同一起点から違う角度・論旨・趣向で展開しより多彩な発見と新しい境地を目指したい。其の部分に続く本論考の最初部分の「莫談国事」(国事を談ずる莫れ)を振って言えば、国政や時事に殆ど触れない「中国的な“鮮烈”と日本的な“円やか”」の学究的な思弁に対して、本論考では逆に「国事莫不談」(天下国家の事は語らないものが無い)という姿勢を取る。政治・世事に対する中国の知識人の態度は古来、「両耳不聞窓外事、一心只読聖賢書」(窓外の事には両耳を塞ぎ、只一心に聖賢の書を読む)と、「風声、雨声、読書声、声声入耳/家事、国事、天下事、事事関心」(風の声、雨の声、読書の声、様々な声が耳に入り/家の事、国の事、天下の事、色々な事に心を寄せる)という二極が有る(前者は明・清に流行した処世訓・格言集『増広賢文』[全称『増広昔時賢文』、編者未詳]の語録、後者は明末の東林党[在野の学者や志を得ない官僚等が参加し、当局に批判的な政治集団]の指導者顧憲成が選んで東林書院に書いた対聯)。上記論考と本論考は同一筆者が類似の主題で同じ導入部から入り同時期に執筆したので、政治に絡めるか否かで完全に違う路線で独り歩きして了うこと自体も研究の対象に為り得る。本論考では藤原定家『明月記』の「紅旗征戎非吾事」(紅旗征戎吾事に非ず)とは反対に、「紅旗・征戎」(此处では20世紀の世界で頻発した革命・戦争に転義)を「亦吾事(なり)」と見做し、日本語で同音の「聖賢」「政権」が代表する雅・俗の両方の事々に悉く関心を寄せる。「持不同政見者」(異端[反体制]の政治的な見解の持主)と取られる危険を覚悟した言及は、謀らずも中国的な「政治・博奕好き」の見本を自ら提供する結果に成るかも知れない。因みに、「政見」は日本語では政治を行う上での見解の意であるが、中国語では一般人も含めての政治的な主張・見解を意味する。

上記論考で取り上げた陳美齡の提言は、とんでもないアイデアを実現させるには海外の文化や考え方を学ぶ必要が有り、其の為に外国語の学習を勧めたいと言うが、本論考では日本語を使いながら非日本的な着想で途轍も無く奇抜な新機軸を心掛けている。三浦しをんの小説『舟を編む』(光文社、2011年)及び同名映画(翌年)の内外での受賞(12—14年)、実録『ケンボー先生と山田先生～辞書に人生を捧げた二人の男』(ドキュメンタリー)の上映(NHK衛星放送プレミアム、13年4月29日)・受賞と翌年の書籍化(佐々木健一著『辞書になった男 ケンボー先生と山田先生』、文藝春秋)等で、国語辞書の面白さ・奥深さ・人間臭さが日本で注目を浴びる様になった。国語は人間の思想・情念形成の育ての親であり、国語辞書は永遠の国語教師であると思う筆者は、本論考では辞書の内容乃至編者の価値観、時代・社会・文化の背景等に焦点を合せて、

茫洋たる「言海」で舟を浮かべる感覚で辞書を縦横無尽に漫遊し（文字通り言葉の海を形容する「言海」は、新村出編『広辞苑』第6版（岩波書店、2008年）の当該項目の語釈の通り、「標準的辞書として永く権威を維持」して来た同名の国語辞書〔大槻文彦編、1巻。文部省の命を受け1875年起稿、86年成った後、89—91年刊（4分冊）〕に引っ掛ける）、言葉から関連の言葉や事象へと渡って「意識の流れ」風の連想・推論を広げて行く。芋蔓式いもづるに現れて来る素材や事象が次々と問題を提起し予定の道筋から逸れたりするが、辞書で隣接する等の言葉の連環や両国の「語縁」に導かれた重層的な縦走は知的な快感を伴う。本論考の論説・論証・論評と考証・考察・推考は多角の視点、多数の対象、多様な意義に因り、自ずから四方八方へ飛散し「行雲流水」の推移とも言えぬ奇想天外な躍動を呈する処が多い。

各段落内及び各段落間に於いては、随処「点→線→面→塊」の発展的な構造を用いている。直前の文脈に繋がる言葉から両言語の比較や関連する言葉・事象へと展開した1つの段落は、1個の立体的な「塊」を為しながらも全体の中では1つの「点」に過ぎない。一定量を持つ意味上の段落群は又「線」と成り、縦横へ延伸する「面」に膨らみ、論考全体の「塊」を築き上げて行く。中国哲学の源頭なる『易経』の卦・爻けいの下の「繫辞」（書き綴る解釈の辞）の字面と重なる様に、辞書の言葉は論考の流れや日・中の対比、言語・社会の相関を繋ぐ構成要素と為っている。「承上啓下」（上を受けて下を導く。「承上起下」とも）という文章作法に沿った心算つもりであるが、日本語に無い此の成語の前半に通じる「承前」と日本語で同音の「悄然」に引っ掛ければ、地を這う人間やうねうねと曲がっている河流のひっそりした蛇行の様な展開と見事に符合する。其々多義を持つ「悄然」「蛇行」は中国語から日本語に入っており、『広辞苑』の「悄然②」（語釈＝「ものさびしいさま。ひっそりしたさま」）の挙例「太平記三七“一として声なし”」は、『日本国語大辞典』第2版（日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編、全14巻、小学館、2000—02年刊）の同項目の①（＝「雰囲気がものさびしいさま。ものしずかなさま」）の漢籍典拠「\*長恨歌伝“〔前略〕悄然無声”」と共通する。中国語の「蛇行」の使用例には、[明]徐弘祖『徐霞客遊記・遊黄山日記後』の「從流石蛇行而上」（流石に沿って上へと蛇行す）も有るが、此の「流石」（水に押し流されて谷間に落ちた石）は日本語では音読の2字漢語に成れなかった。『日本国語大辞典』の「さすが【流石・遠・有繫】」は品詞から語義まで此の「流石」とは接点が無い。漢字表記の「有繫」は巡り巡って「繫辞」とも繋がりがあるが、辞書から採った「流石」の合間を縫う本論考の「蛇行」は日本では流石さすがに変哲過ぎるであろう。

20世紀日本の最高の文芸評論家として誉れ高い小林秀雄は1938年3月、『文芸春秋』特派の従軍記者として日本軍の占領下に在る上海・杭州・南京・蘇州を訪れた。6月同誌に発表した「蘇州」<sup>1)</sup>の中で彼は「蘇州第一の名園」の評判を聞いた獅子林やりだまを槍玉に上げ、呆れて物も言えない様な所謂「馬鹿々々しさ」を痛烈な罵倒調で完膚無きまで貶めている。曰く、「廢園」と化

した同市の多くの庭園と同様、岩は其の肌と同じ厭な色合いのセメントで繋ぎ合せて色々奇妙な形を拵え上げており、「セメントの継目が目立たぬ様に特にセメント色の岩を選んだものか、と思ってみたが、そこまで気を配ってはこんな馬鹿げたものが出来る道理がない、してみるとこの辺にはこんなやくざな石しか転がっていないと見える。〔中略〕又僕等の子供の時分にあった勤工場の様に、一たん這入ると直ぐには出られない様な仕掛けになっている。可成りの広さはあるが、それを出来るだけ長い事かかって歩かせる様に、一本道の石を畳んだ小徑を曲りくねらせている。つい眼の先きにある小高い岩山に登るにも、中腰になって潜らねばならない洞穴を、向うに連れて行かれたり、こっちに連れ戻されたりした揚句、ぽっかりと頂上に押し出されるといふあんばいで、実際洞穴の中で地雷火でも仕掛けたくなかった。」更に、「俗悪な岩」で作られた庭は「何やら工夫はしきりにやっている」が、「その大真面目に違いないという処がどうも僕の理解の範囲を越える」、と言う。勤工場は明治・大正時代に複数の商店が1つの建物の中に種々の商品を陳列し販売する処であり、百貨店の発達に因って衰えたので死語と成って久しい。其の込み入った施設に見立てて獅子林の「迷宮」を揶揄するのは小林流の辛辣さが好く出るが、大正初頭から100年経った目下の商店の商品陳列に絡んだ比喩で「大真面目」さを弁護したい。

『読売新聞』2014年2月27日（大阪本社版）投書版（12版）の「今日のノート」欄に、「ありえない光景」と題する文（文化・生活部次長藤井泰介）が有り、ドイツの写真家アンドレアス・グルスキーの作品「99」の印象が綴られている。曰く、日本で言うと100円ショップの店内を高い位置から見下ろした巨大な写真（縦207センチ、横325センチ）では、画面を横切る10列程の棚、店の奥まで無数の商品が並び、正面に立つと視野一杯に作品が広がり脚立の上から店を見る様だが、全体を見て細部に目を凝らすと何処か違和感が有る。「じわじわと分かってきた。商品が鮮明に見えるのだ。一番奥にある商品のロゴが読めるほど、ぴたりとピントが合っている。/私たちは通常、関心を持ったものにのみ、目の焦点を合わせる。『99』は、無数の商品に同時に等しく関心を持ちながら、俯瞰した際の景色。それは不可能だから、心がざわついたのだろう。」店の奥だけ、次は其の前という風に分割撮影した写真をデジタル処理した作品は、「ありふれているようで、ありえない光景をつくる狙いを想像しつつ、小さな謎解きまで楽しめる」と言う。鮮明に撮影された高解像度の写真よりも真に逼る超現実主義の絵画と同工異曲の創意であるが、現実に基づき且つ現実を超越した様な有り得ない光景は「清明上河図」にも別の形で見られる。清明節で賑わう首都汴京（開封）の風物を現した〔北宋〕張昞端筆の画卷（北京故宫博物館蔵）は、横528.7、縦24.8センチの絹本に500余りの人や数多くの動物、各種の車・船・家屋を描いた逸品である。（画面上の人物の数は諸説が有り、『世界美術大全集・東洋編 第5巻 五代・北宋・遼・西夏』〔責任編集＝小川裕充・弓場紀知、小学館、1998年〕の「作品解説」には、「画中に描かれたさまざまな職業の人々は、一説には810名を超えるといわれ、

行動も変化に富んでいる」と有る〔「47～50」伝 張挾端 清明上河図巻〕〔竹浪遠〕<sup>2)</sup>が、本稿では『中国百科大辞典』〔中国百科大辞典編撰委員会編、王伯恭主編、全9巻、中国大百科全書出版社、1999年〕の当該項目に拠り、敢えて控え目な方を取る。）広大な空間の中の人間模様を墨画淡彩で微に入り細に亘って表した精密さは驚嘆させられるが、同一画面に複数の視点を持つ中国画の伝統的な「散点透視」が其れを可能にした側面も大きい。中国語で「焦点透視」と言う西洋の遠近法に対して視点の移動、転換、合成の自由度が高いが、論理・形式上の整合や均衡を気にせず目視の有りの儘より心眼の「我が儘」を重んじる処は、遠近を問わず店内の夥しい商品に万遍無く写真機の焦点を当てた風変りの野心作とも通じよう。獅子林の「勸工場」風も反自然・反秩序に由る創造の主体性や自己実現の最大化の所産と見做せ、洗練された形で小さく纏まることに物足り無さを覚える食欲も見て取れる。

「これは精煉された味も素朴な味もなくただ馬鹿々々しいなりに完全なのだ。僕にはわからぬ何か明瞭な企図を隠して完全なのである。するとこの庭の享楽者の精神が、馬鹿々々しく而も完全だ、と見ねばならぬ」と小林秀雄は「蘇州」で「聯想を走らせている」が、馬鹿にされた「完全」志向と「享楽者の精神」は、中国文学者井波律子が指摘した「中国的大快樂主義」「物量主義」「欲望の自己増殖」<sup>3)</sup>を連想させる。本論考も継目が目立たぬ様に繋ぎ合せた岩の堆積の観が有り「馬鹿げた」の印象を免れ難いが、明瞭でもなく隠すわけも無い企図は関心の対象を網羅的に挙げ疑義を解決することに他ならない。西洋絵画の遠近法と通常の写真の「決定的な瞬間/場面を切り取る」発想・技法で進めるなら、固定化した視座に囚われて視野内の多くの関連材料に対する追究を断念しなければ成らない。広く渡り歩いて探し求める意から沢山の書物等を読み漁ることに譬える「涉獵」の字・義から、日本語の「漁師」「獵師」の同音の妙味と此の文脈での「涉・獵」の示唆に気付かされる。「同じ川に2度入ることは出来ない」と古代希臘の哲学者ヘラクレイトスは言い、西洋の諺に「二兎を追う者は一兎をも得ず」(If you run after two hares, you will catch neither. 中国語訳 = 「逐二兎者不得其一」)と有るが、何れも「焦点透視」の限界や全方位的な捕捉及び一網打尽の困難さを言い得ている。斯うした両全の「両難」(ジレンマを表す中国語)及び解決策を提示した先哲の名言として、「子在川上曰：“逝者如斯夫！不舍昼夜。”」(子、川の上に在りて曰く、「逝く者は斯くの如きか。昼夜を舍めず」)が思い当る。『論語・子罕』に見える此の語録は「光陰似箭」(光陰矢の如し)の儂さの感慨として知られるが、「転瞬即逝」(瞬く間に過ぎ去る)故に執着して行く進取精神の提唱という解釈も有力である。「逝者」は既に去ったものとこれから赴くものという両義が有るが、「不舍」は「舍不得」(離れ難い。忍び難い。勿体無い)と結び付ければ、「昼夜不舍」(昼夜離れず)や「鏗而不舍」(彫刻の手作業を完成まで止めない。粘り強く事を行き続ける譬え)の執念も読み取れる。「極楽の夢を楽しむには、あのセメント製の奇岩怪石が、抜き差しならぬものとはならないか」、という「蘇州」の直感<sup>あへん</sup>は女色・鴉片等の享受に耽る物質的な欲望・

快感を皮肉のものであるが、『論語』の冒頭から孔子が繰り返して力説した学問を究める悦びへの追求に於いても、あの紆余曲折な小徑や地下の洞穴を通る様な「雌伏→至福」の過程が欠かせない。「書山有路勤為徑、学海無涯苦作舟」（書の山に路有り勤〔勉〕を徑と為し、学の海は涯無く〔刻〕苦を舟と作す）という韓愈の名句を思い起せば、中国庭園に多い複雑な造りの完全嗜好は「苦尽甘来」（苦境が終り楽な状況が生れて来ること）を思わせる志向も感じ取れて来る。

「繁華な街中に、厳めしい鉄門のある見上げるばかりの土塀を廻らし、池を掘り、岩を畳み、洞を通じ、橋を渡し、亭を作り、廻廊を廻らし、ただもう呆れ返った不様である。〔中略〕龍安寺の庭を知っている僕等には、言葉もないのである。」国際連合教育科学文化機関が1978年から認定して来た世界文化遺産には、龍安寺を含む17（奇しくも俳句の字数と一致）の「古都京都の文化財」は94年に登録されたが、獅子林も入る9つ（1桁数中の最大につき中国人好み）の「蘇州古典園林」も登録されている（97年に拙政園・留園・網師園・環秀山荘が登録、2000年には滄浪亭・獅子林・芸園・耦園・退園が追加登録）。上記評論では「留園、西園、可園、遂園、拙政園、滄浪亭」も「廢園」と断じられたが、「蘇州4大庭園」（建造時代の順では宋の滄浪亭、元の獅子林、明の拙政園、清の留園）は全て否定されたわけである。『広辞苑』では「廢園・廢苑」（中国語でも同音の feiyuan、但し「園」と「苑」は其々第2声と第3声）の定義は「荒れすたれた庭園」であるが、「蘇州」の中で「どれも大同小異である」と言う庭園群に対する此の形容は、「別して荒れたという趣もなく、ただ下らぬものが下らなく腐って壊れているさま」を意味する。獅子林は「修理保存が、ほぼ完全に近い、つまりその馬鹿々々しさもよくわかる」と酷評されたが、修繕・保全が一層進んでいる今や寧ろ日本的な趣味との懸隔が更に大きく成るかも知れない。日本の古典から仏蘭西文学、西欧の音楽・絵画等に造詣が深い小林秀雄の高邁な審美眼には、彼我の雲泥の差（中国語では「雲泥之別」「雲泥之差」）が映った様である。

『広辞苑』の「雲泥之差」の項では「〔後漢書矯慎伝〕」が出典とされ、「天地霄壤之差」「月窟之差」が類義語として挙げられている。『日本国語大辞典』の「雲泥」の項の子見出し「うん-でい の=差(さ) [=差別〈さべつ・しゃべつ〉・=相違〈そうい〉・=変〈か〉わり・=違〈ちが〉い・=懸隔〈けんかく〉・=隔〈へだ〉て]」では、「\*どちりいなきりしたん（一五九二年版）（1592）」を初めとする8点の和文典拠が有るが、漢籍出典は皆無である。『漢語大詞典』（羅竹風主編、全13巻、[上海]漢語大詞典出版社1986—94年刊）では、「雲泥之別」と「雲泥之差」（空見出し、用例は前項に収録）の其々の唯一の用例は、「錢鐘書《困城》八」と「郭沫若《石鼓文研究・古拓二種之比較》」から採ったものである。2点は其々1947年に上海晨光出版公司より、39年に商務印書館（重慶）より刊行されたもので、成立時期及び「知日派」郭の率先した使用から日本語由来の成語であろうと推測できる。「雲泥」の項では「〔後漢

書・逸民伝・矯慎：“〔前略〕乘雲行泥〔下略〕”を語源とし、「南朝梁荀濟《贈陰梁州》詩：“雲泥已殊路，暄涼詎同節。”」を初出典拠としている（本稿に於ける中国の辞書・文献の引用は日本語の漢字を用いるが、句読点・符号等の表記に関しては、日本語との混同で理解を妨げかねない為に原文に従う）。此の単語は『日本国語大辞典』では、「①雲と泥。違いのはなはだしいことのたとえ。雲壤（うんじょう）。霄壤（しょうじょう）。②（一する）はなはだしく違うこと」の両義と為り、①には「\*杜甫-送韋書記赴安西詩“夫子欵通貴、雲泥相望懸」が付いており、②は和文出典（3点）のみ有るが、「\*三国伝記（1407—46頃か）八・一二“自余の僧は仏果菩提の為に戒を持が故に其の志遥に雲泥せり”」を初めとする動詞の使い方は、中国の辞書で動詞と表記する単語を名詞とすることが多い日本の辞書にしては珍しい。「雲泥」は中国語では動詞と成り得ないので奇異な印象が付き纏うが、「雲」と「泥」を其々他者への尊称と自分の謙称に使う中国語の用法（『漢語大詞典』の「雲泥」の項では、呉沃堯著、上海広智書局1906—10年刊長篇小説『二十年目睹之怪現狀』[20年目睹之怪現狀]の用例が示されている）も、日本語に無い独自性が両言語の特質の分析・比較の好材料に為る。

『広辞苑』の「雲泥」の項目は、「天にある雲と地にある泥。転じて、隔たりのはなはだしいたとえ。平家四“源平いづれ勝劣なかりしかども、今は一交りを隔てて、主従の礼にも猶劣れり”と為っている。『日本国語大辞典』の同項目の①の和文出典では、「\*平家（13C前）四・源氏揃」の此の件は3点目に当る（上記引用の前に「朝敵をも平げ、宿望を遂げし事は、」と有り、文中の「なかりしかども」は「無かりしか共」、「交り」は「まじはり」に作る）。初出の「\*菅家文章（900頃）二・山家晚秋“雲泥不計地高卑、風月只期天久遠”」も、次の「\*明衡往来（11C中か）中末“如仰参会可承委旨也。雲泥交隔不観不容易”」も、時代が遙かに早いにも関わらず『広辞苑』の挙例には成らなかった。『平家物語』の知名度の高さと現代に於ける漢詩文の馴染みの低さが理由として考えられるが、千年前の日本の文人や政治家等が其れ程自主的・自在に純漢語の詩文を作っていた事には、隔世の感（中国語＝「恍如／有如隔世」）と言うより「隔千年紀」（造語）の感を禁じ得ない。最初から和製ではない此の単語は②でも『広辞苑』の項でも和文出典しか引いてないが、『現代漢語詞典』第6版（中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編、[北京]商務印書館、2012年）の未採録と照合すれば、日本語の一種の偏愛が見えて来る。『現代漢語詞典』で唯一立項されたのは「雲泥之別」であり、語釈は「相差像天空の雲和地下の泥、形容極大的差別」（空の雲と地上の泥の様に隔たっている。極めて大きな違いの譬え）と言う。『日本国語大辞典』の「雲泥の差[差別/相違/変わり/違い/懸隔/隔て]」の挙例中の「雲泥の」の後の単語の表記は、「差別（シャベツ）→ヘダテチャ→懸隔→変り→違（チガ）ひ→懸隔（ケンカク）→相違（サウキ）→差」という推移を経て「差」に落ち着いたが、『現代漢語詞典』の語釈中にも有る最初の「差別」から両言語では其々1字が正統とされ、中国語で主と為る「別」は日本語では遂に「雲泥」と結合しなかった。

『広辞苑』で更に設けられた「雲泥万里<sup>ばんり</sup>」の項の語釈と典拠は、「天地の差のように隔たりのはなはだしいこと。浄、嫗山姥<sup>もろちや</sup>“娘をころりと落したと。首をころりと落すとは一”」である。『日本国語大辞典』の同項目の和文のみの出処（5点）中の3点目が、此の「\*浄瑠璃-嫗山姥（1712頃）二“娘をころりと落したと。首をころりと落すとはうんでいばんりと恥じむる”」である。其の前の「\*和漢朗詠（1018頃）下・慶賀」と「\*太平記（14C後）三九・大内介降参事」は、用例中の「〔前略〕雲泥万里眼今窮まんぬ」と「〔前略〕雲泥（デイ）万里の隔其中に有りと云つべし」は、見出しの漢字を使っているのに『広辞苑』では採録されていない。仮名表記の方が挙例と為るのは『広辞苑』の脱漢字の傾向に似合わなくもないが、「雲泥万里」の項内に矢印（中国語で「箭頭〔号〕」と言う）→で関連を示す「うんでん-ばんてん」の項（語釈＝「雲泥万里<sup>ばんり</sup>の訛。うってんばってん」）も、仮名表記の見出しと為っている。使用例の「浮世風呂ニ“おらん所の気位とは、一の違えよ”」は、『日本国語大辞典』の項（品詞＝（連）即ち連体詞）の初出「\*浮世風呂（1809—13）四・下“おらがわけえ時代の行作とは、雲泥万里（ウッテンバッテンのちげえだァ）”」と同一文献であるが、出典の漢字表示は見出しに成らず、2点目（最後）の「\*当世書生氣質（1885—86）〈坪内逍遙〉一〇“僕と彼とを同視するのは月とスッポン、ウッテンバッテン”」では<sup>すて</sup>に漢字<sup>や</sup>を止めている。「雲泥万里」の項目の語誌の説明では、「中国の古典に、四字熟語の成句として存したかは不詳。日本では、中世、近世を通して広く用いられていたらしく、元禄一二年（一六九九）の『諺草-字』に“雲泥万里（ウンデイバンリ）〈略〉雲天万里と云は誤”とあり、他に、“うんでんばんてん”“うんでんばんり”“うってんばってん”など種々の転訛形がみられる。」（〈略〉は原文の儘。本稿筆者に由る引用中の省略は〔前略〕〔中略〕〔下略〕で表示する。）「雲泥の差（別）」の初出より600年近く現れた「雲泥万里」は此れ程<sup>ほど</sup>発達して来たが、『漢語大詞典』には此の成語は無く「雲泥異路」が有る。「宋陳亮《与辛幼安殿撰書》」の典拠を初出とする此の項の語釈は、「像天上的雲和地上的雲。比喻地位相差懸殊」（天に在る雲と地に在る雲の様。地位の差が甚だしい譬え）であるが、日本語の「雲泥」の初出の『菅家文草』に有る「地高卑」と繋がっている。

1987年6月4日、柳谷謙介外務事務次官は鄧小平（中共中央顧問委员会主任）を「雲の上の人になった」と評したが、中国側の猛反発を受けて渋々失礼を認め舌禍の責任を取る形で18日に辞意を表明した。『広辞苑』の「雲の上」の語釈は「①雲のある高い所。天上。②禁中。雲居<sup>くも</sup>」で、後者に典拠の「古今和歌集雑“一まで聞え継がなむ”」が付いている。権力の「奥の院」（最高所）に居る偉い人が実情を把握し切れていないという本意に照らしても、「高高在上」（『現代漢語詞典』の語釈＝「形容領導者不深入實際，脫離群眾」〔指導者が実情に密着せず、大衆から遊離することを形容して言う〕）に近い意味と理解した方が順当であるが、老年痴呆症問題を取り上げた有吉佐和子の長篇小説『恍惚の人』（新潮社、1972年）の影響からか、鄧は其の指摘を「老糊塗」（老い惚れ<sup>ぼ</sup>）への揶揄と取り違えて了<sup>しま</sup>い両国関係に緊張が走った。<sup>4)</sup>



まさか「雲の上」を「雲上」と同義の「雲上頭」（「上頭」は「上」の他「上役」<sup>うわやく</sup>の意も有る）と訳して、「雲」と「暈」の同音（yun、其々第2声、第1声）から「暈頭」（頭がくらくらする）に聞えた、という様な複雑怪奇な誤解が生じたことは想像し難いが、「雲の上」の高位の意を片方に含む「雲泥異路」の中の「異路」は其の齟齬への理解に役立つ。『広辞苑』にも『現代漢語詞典』にも無い此の単語は、『日本国語大辞典』では語釈の「〔名〕違ったみち。別のみち」と和文出典（2点）の後に、漢籍「\*史記-太史公自序“直所<sub>レ</sub>従言<sub>レ</sub>之異路、有<sub>レ</sub>省不省<sub>レ</sub>耳”」も引かれている。文中の「言・路」は両言語共通の「言路」から中国語の「思路」「心路」を連想させ、言説・思考・心性の道筋<sup>ロジック</sup>の型の相違を考えさせる手掛りに成る。

「言路」は『日本国語大辞典』では、「〔名〕上の者に対して、臣下が意見を述べるためのみち。進言するみち」と説明されている。和文用例の初出「\*随筆・折たく柴の記（1716頃）中“世の言路を塞（ふさ）がん事、もっともしかるべからず”」は、「\*後漢書-袁紹伝“操欲<sub>レ</sub>迷<sub>レ</sub>奪時明<sub>レ</sub>、杜<sub>レ</sub>絶言路<sub>上</sub>”」の用法と呼応する。3点中の2点目「\*文明論之概略（1875）〈福沢諭吉〉六・一〇“言路を開き人物を登用するの時節なれば”」は、『広辞苑』の同項目の「臣下が、上に対して進言するみち。“一を開く”」に投影されている。中国語の「開言路」に当る此の例示は今も好く使われている様な印象を与えるが、同辞書の定義では「臣下」は「君主に仕える者。臣。けらい」、「君主」は「世襲による国家の統治者。王。天子。皇帝」なので、「（19）55年体制」（保守・革新の二大政党〔自民・社会〕制）発足の年の第1版刊行の時点には、日本では臣下が君主に仕える様な時代錯誤<sup>すで</sup>の仕組みは已に無くなっていた。戦前の日本や古今の他の君主国の場合を想定した挙例ならともなく、戦後にも天皇からの拜命を受ける含みの有る「大臣」の官職名は旧態依然として残っており、1952年明仁親王の立太子礼の際に天皇に「臣茂」と自称した尊皇家の首相も居たものの、国政に関れない天皇が政を執る高官（「大臣①」）の語釈の進言を受けることは忌まれている。「天皇」の「①皇帝・天子の敬称。②明治憲法では、大日本帝国の元首。日本国憲法では、日本国および日本国民統合の象徴とされ、国家的儀礼としての国事行為のみを行い、国政に関する権能は持たない。男系の男子がこの地位を継承する。古くは“すめらみこと”“すめろき”“すべらぎ”など呼んだ」に対して、『新明解国語辞典』第7版（山田忠雄・酒井憲二・柴田武・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之編、三省堂、2012年）の同項目は、「日本国および日本国民の統合の象徴として位置づけられる地位（にある人）。〔俗に、その世界で非常に勢力のある人の意にも用いられる。⇒法王〕」と実情に即して定義している。『日本国語大辞典』では「〔名〕（“てんおう”の連声〔れんじょう〕）①一国を統治する天子、国王、皇帝などに相当する呼称。すめらみこと。みかど。②（近代日本における天皇）旧憲法では国家の元首とされ、統治権を総攬（そうらん）し、絶対的な地位を有し神聖不可侵とされた。新憲法では日本国および日本国民統合の象徴とされ、国事に関する行為だけを行ない、その地位は主権者である国民の総意に基づくとされる。皇室典範の定め

により皇統に属する男系の男子がこの地位を継承する」と説明され、①に漢籍典拠「\*旧唐書-高宗紀・下“皇帝、称<sub>二</sub>天皇<sub>一</sub>”」も引かれているが、日本最大規模の此の国語辞書の網羅的な語義採録も不敬な俗の比喻を外している。『広辞苑』は第1版の「自序」の落款「京都 新村出」の様に「在野精神」の<sup>イメージ</sup>形象が強いが、此の扱いを見ても分る様に『新明解国語辞典』と比べて寧ろ正統派の部類に入るのである。

故に本論考では日本で最も売れている小型国語辞典の『新明解国語辞典』よりも、刊行元の岩波書店の名声も相俟<sup>あいま</sup>って被引用度の高い『広辞苑』を主な参照系にしているが、『現代漢語詞典』が其れと対を成すのは中国政府の「智库」(シンクタンク)の所産の為であり、1956年に国务院(内閣)の指示で編纂を始めた経緯も「**準官製**」の性質を規定している。其の「言路」の語釈は「**[名]**向政府或領導提出批評或建議的途徑」(《名》政府或いは指導者に対して批判或いは提案をする<sup>ルート</sup>経路)で、「広開～|<sup>ネットワーク</sup>ネットワーク為群眾提供了一条暢通的～」(「言路を広く開く」「ネットワークは大衆の為に便利な<sup>ルート</sup>手段を提供している」という用例も付いている。『漢語大詞典』の①「旧指人臣向朝廷進言的途徑」(古く、人臣が朝廷に進言する<sup>ルート</sup>経路を指した)では、初出典拠「漢陳琳《為袁紹檄豫州》：“操欲迷奪時明，杜絕言路。”」の次の「\*宋蘇軾《司馬溫公神道碑》」に「開言路」が出ている。『現代漢語辞典』と同じ語釈の②の2点の出典は、「魯迅《准風月談・“商定”文豪：“筆頭也是尖的，也要鑽。言路的窄，現在也如活路一樣，所以只好對於文芸雜誌廣告的誇大，前去刺一下。”」(魯迅『准風月談・「商家製」文豪』：“筆先は尖っている物だから、隙を衝かねば成らない。言路も今や、活路と同様に狭い。故に、文芸雑誌の誇大広告に対して、一突きして行るしか無い。))、「鄧小平《新時期的統一戰線和人民協的任務》：“我們要廣開言路，廣開才路。”」(鄧小平『新時期的統一戰線と人民政治協商會議の任務』：“私たちは言路を広く開き、賢路を広く開かなければ成らない))である。同辞書で明記されない文献の発表時期は其々33年11月11日(上海『申報』「自由談」)、79年6月15日(中国人民政治協商會議第5期全国委員会第2回會議に於ける開会の辞)である。「自在景」の<sup>ペン・ネーム</sup>筆名を使った魯迅の其の文章は「自由談」の<sup>コラム</sup>短評欄名とは裏腹に、「言路的窄，現在也如活路一樣，所以」に強調を表す傍点〔・〕(中国語=「着重号」。縦書きでは字の右、横書きの場合は日本語と逆に字の下に)を付け、此の部分と「只好」の間に「(以上十五字，刊出時作“別的地方鑽不進”)」(「以上の15字は、[新聞]掲載の時“別の場所には<sup>もぐ</sup>潜れない”と為っていた)と有る。雜文集『准風月談』([上海]興中書局、34年)で披露された其の裏話は言論の不自由を窺わせるが、「改革・開放元年」の鄧小平の呼び掛けも其れまでの長年の言路閉塞の裏返しに他ならない。78年12月の党中央第11期第3回総会で改革・開放が決断されたのは「第二の開国」と言えるが、58年に初稿が完成した『現代漢語詞典』の第1版が此の年に漸く上梓に漕ぎ着けたのは、毛沢東時代の度重なる失政で言説及び人材活用の道が封殺され続けたという要因が大きい。『現代漢語詞典』にも『漢語大詞典』にも無い「才路」の訳「賢路」は両言語共通のもので、『現代漢語大(44)

語詞典』では「〈書〉名指賢能の人被任用的機会：広開〜」（〈文章語〉）（名）道德・才能の有る人が任用される機会を指す。「賢路を広く開く」、『広辞苑』では「賢者の昇進する路」と説明され、熟語「賢路を塞ぐ」の項（＝「賢者の昇進する邪魔となるのも顧みず、不徳不才の者が官職にとどまっていること」）も有る。『日本国語大辞典』の「賢路」と「けんろを＝塞（ふさ）ぐ [= 妨（ふせ）ぐ]」の項には、其々「\*杜甫－行此昭陵“直詞寧戮辱、賢路不<sub>レ</sub>崎嶇<sub>二</sub>”」と「\*潘岳－河陽県作詩“在<sub>レ</sub>疾妨<sub>二</sub>賢路<sub>一</sub>、再升<sub>二</sub>上宰朝<sub>一</sub>”」が引いてあるが、成句を子見出しとして立項した処は中国語よりも漢籍を重宝することが多い日本語らしい。

『現代漢語詞典』の語釈中の「賢能」は同辞書で、「①形有道德、有才能：～之士。②名指有道德、有才能的人：另举〜」（①（形）道德が有り、才能が有る。「賢能の士」。②（名）道德が有り才能が有る人を指す。「別に賢能を推挙する」）と説明されているが、『広辞苑』『日本国語大辞典』の語釈は俱に「賢くて才能あること。また、その人」である。『広辞苑』の「かしこ・い【賢い】」の項目は、「(形)文かしこ・し（ク）（「畏<sub>レ</sub>し」の転義）①おそろしいほど明察の力がある。源桐壺“一・き相人”②才知・思慮・分別などがきわだっている。源藤袴“さすがに一・くあやまちすまじくなどして”。“一・い判断”“一・い子”③（生き物や事物の）性状・性能がすぐれている。すばらしい。大和“磐手の郡より奉れる御鷹よになく一・かりければ”。落窪“一・き物をも買ひてけるかな。この箱の様に、今の世の蒔絵こそ更にかくせぬ”④抜け目がない。巧妙である。利口だ。源帚木“また並ぶ人なくあるべきやうなど一・く教へ立つるかなと思ひ給へて”。“一・く立ち回る”⑤尊貴である。たいそう大事である。源若業上“一・き筋と聞ゆれど”。源若紫“うちに奉らむと一・ういつき侍りしを”→かしこきあたり。⑥（めぐりあわせなどが）望ましい状態である。よい具合である。源若業上“風吹かず、一・き日なりと興じて”⑦（連用形を副詞的に用いて）非常に。はなはだしく。土佐“これかれ一・くなくげく”という多義を記しているが、典籍及び現代の用法が此れ程多く挙げられているだけに道德の要素の欠落が腑に落ちない。『日本国語大辞典』の「かしこ・い【畏・恐・賢】」の①～⑦の諸語義では、「③他からあがめ敬われる程にすぐれているさま。また、それに対する尊敬、賛美の気持を表わす」の中に、「イ国柄、血筋、身分などがすぐれている。尊い。徳が高い。尊敬すべきだ」と有る。次の「ロ才能、知能、思慮、分別などの点ですぐれている」の典拠（8点）の初出は、「\*書紀（720）天武元年六月（北野本訓）“其れ近江の朝には左右大臣、及び、智謀（カシコキ）群臣共に議を定む”」である。『広辞苑』②と違う2ヵ所の『源氏物語』の使用例も有るが、当初「智謀」で表記された此の語義はイの「高德」より、「高得点」（「高德」に引っ掛けた和製漢語）を以て定着し今に至っている。因みに、『現代漢語詞典』に無い「高德」は『広辞苑』で「すぐれて徳の高いこと。“一の僧”」と説明されているが、『日本国語大辞典』の「（名）すぐれて高い徳。また、その徳のある人」の性質・持主の両義は、『漢語大詞典』の「①德行崇高；崇高的德行。②指有崇高德行的人」（①徳行が崇高であること。崇高な徳行。②

崇高な徳行を備えた人を指す)に合致する。漢籍典拠「\*徐陵-広州刺史鷗陽顔徳政碑“衡山誕<sub>レ</sub>其高德<sub>レ</sub>、湘水降<sub>レ</sub>其清輝<sub>レ</sub>”」は、①の初出『魏書・釈老志』の文の後に「南朝陳徐陵《広州刺史鷗陽顔徳政碑》」の表記で出ている。

「徳行」は『現代漢語詞典』では「**名** 道德和品行」(《名》 道德と品行)と説明され、「先生的文章、～都為世人所推重」(先生の記事・徳行は共に世の中の人々から高く評価されている)という例文も付いている。「推重」は「**動** 重視某人的思想、才能、行為、著作、発明等、給以很高的評価」(《動》 ある人の思想・才能・行為・著作・発明等を重視し、非常に高い評価を与える)と定義され、例文に「非常～他的為人」(彼の人と為りを非常に高く評価する)と有る。『広辞苑』の語釈が「重んじて人にすすめること」と為る「推重」は『日本国語大辞典』では、「《名》 すぐれたものとして、とうとび重んずること。推尊」と中国の辞書に近い解釈が為され、「\*宋書-賈音伝」の典拠も付けられている。『漢語大辞典』の語釈中の高い評価の対象で思想と才能が1番、2番と為り、次の著作、発明も思想(及び才能)、才能の表現・所産と言って能いので、日本語の「賢能」の「賢い・才能」に対する其の「道德、才能」の要素・順位に合致する。『漢語大辞典』の同単語の「①有徳行有才能。②有徳行有才能的人」(①徳行が有り才能が有る。②徳行が有り才能が有る人)も同じであるが、同辞書の「高德」の語釈でも使われた「徳行」は日本語にも入っている。『広辞苑』には「道德になつたよいおこない。“君子の一”」という用例付きの項が有り、『日本国語大辞典』の説明は「《名》 道德になつた正しい行ない。道德的な行為。とくぎょう」で、「\*易経-習坎卦“君子以常<sub>レ</sub>徳行<sub>レ</sub>、習<sub>レ</sub>教事<sub>レ</sub>”」が漢籍典拠として引用されている。『漢語大辞典』の同項目では「道德品行」の意の典拠の7点中の最初の2点は、「《易・節》：“君子以制数度，議徳行。”孔穎達疏：“徳行謂人才堪任之優劣。”」である。同じ言葉の「引経拠典」(経典を引き論<sup>よりどころ</sup>の拠とする)は同じ書物からでも篇章や語句が違うのは、『広辞苑』と『日本国語大辞典』の「賢い」に限らず両国の辞書の間には好く見られる。『漢語大辞典』で『易経・節象』の1節が選ばれたのは関連の疏との対も一因であろうが、唐太宗李世民(626—49年在位)の命を受け『五経正義』を編纂した彼の経学者に由る疏は、此の文脈では「疏」の学問的な方法及び自然・社会の事象・営為等の多義で示唆を与える。

此の字は『広辞苑』の項目では「(“疎”の本字。呉音はシヨ)」と説明され、4つの語義の中でこれに当るのは「③注釈。注に対してさらに注を加えたもの。しよ。“三経義一<sup>ぎし</sup>”」である。『現代漢語詞典』の「疏(疎)」の項目の多義(合計10)中の該当箇所の⑨は、「古書的比“注”更詳細の注解：“注”的注：《十三経注～》(古代の書物に於ける、「注」よりも詳細な注解。「注」に対する注。『十三経注疏』)」と言う。『広辞苑』の「注」は「(「註」とも書く)」という説明が有り、語釈・挙例は「①書きしるすこと。②本文の間に書き入れて、その意義を説明すること。そのような説明。“一を付ける”」と為っている。『日本国語大辞典』の「注・註」の語釈「《名》 本文の意味を補足したりくわしく説明したりするために書き入れること。また、その文句。注

解」は、本文の間や意義の説明に限定しない点で形態や目的が多様な実情により近いが、「\*晋書-向秀伝」の典拠を引いた此の項目は1義のみで『広辞苑』の①の意が無い。『現代漢語詞典』の「注<sup>2</sup>（註）」では此の語義も含まれているが、「①動用文字来解釈字句。②名解釈字句的文字。③記載；登記」（①《動》文字で字句を解釈する。②《名》字句を解釈する文字。③記載 [する]。登録 [する]）と言う様に、動詞が先導し名詞でもある注解の意の後に置かれるものである。『広辞苑』と比べて字句、文字の「字」の要素が強調されているが、『日本国語大辞典』の「注・註」一体に対して「註」は異体扱いとされている。2字俱「主張」「主義」等の「主」を含む処は注解の自主性を象徴する様にも映るが、言偏（中国語＝「言字旁」）より三水偏（同＝「三点水」）の方が正字と為るのも興味深い。「註」の併記が無い『現代漢語詞典』の「注<sup>1</sup>」の4語義の中で、「①灌入」（①注入する [こと]）及び「②（精神、力量）集中」（② [精神・気力] を集中する [こと]）が此れに関連して来る。挙例（各2点、4点）中の「～射」と「～視 | ～意 | ～目」は日本語と一緒にあるが、前者と後者の其々の最後の「大雨如～」（注ぐ様な大雨）と「貫～」（①傾注する。集中する。②一貫している。繋がっている）は、中国語独特の表現として中国的な注解作業の「注入・貫流」の性格を掴む手掛りに成る。「注<sup>2</sup>（註）①」の最初の挙例「批～」は、「①動加批語和注解。②名指批評和注解的文字」（①《動》評語や注解を付ける。②《名》批評や注解の文を指す）の両義（②は例文 [1点] 付き）である。其の中の「批語」（語釈＝「名①対文章、作業等的評語。②批示公文的話」[《名》①文章・宿題等に対する評語。②公文書に対する書面訓示]）、又「批示」（書面訓示 [をする]）。両義の語釈・挙例 [各1点] は略すも「批注」と共に日本語には無い。中国語で批判の意も有る「批評」や両言語共通の「批判」の「批」と「注」との関連は、中国古来の注解の実践と理念に顕れた批判精神の一端の表徴として注目に値する。

掲載誌の規定によって本稿が分類されている「論説」は『日本国語大辞典』では、「《名》物事の理非を論じ、主張を述べ、また解説すること。また、その文章。特に、現代では新聞の社説など時事問題について論じ述べたものをいう。論説文」と定義されている。漢籍典拠「\*王褒-得賢臣頌“千載壹合、論説無<sub>レ</sub>疑”」の前に載っている和文使用例では、「\*妙一本仮名書き法華経（鎌倉中）五・提婆達多品第十二」を初めとする5点の中、4点目「\*随筆・胆大小心録（1808）四」までは何れも動詞として使われたものである。日本語では動詞由来の単語でも名詞の用法が優勢に成り辞書で名詞と規定され勝ちであるが、「動→名」の変遷には「一動不如一静」（一動は一静に如かず）の価値判断が読み取れる。『現代漢語詞典』に項が無い此の中国の成語は『漢語大詞典』で、「本謂動不如静。後亦作多一事不如少一事解」（本は、動は静に如かぬことを謂う。後に亦、一事を多くするは一事を省くに如かざるの意とも解せる）と説明されている。典拠（5点）の初出「宋張端義《貴耳集》卷上：“孝宗幸天竺及靈隱，有輝僧相隨。見飛來峰，問輝曰：‘既是飛來，如何不飛去？’對曰：‘一動不如一静。’”」は、杭州行幸中の皇

帝の当地名所に関する下問と御伴した僧侶の当意即妙の答えである。「既に是飛び来たれば、如何でか飛び去らざる」という諧謔な質問は、靈隱寺の門前に在り石仏彫刻が数多く有る小高い峰の「飛来」の名称の非対称性を衝いたが、対えた解説は伝説に整合性を与える機智と共に処世の哲学を示唆する禅味が滲み出ている。蘇軾「遊靈隱寺得來詩復用前韻」に「溪山处处皆可廬，最愛靈隱飛來孤」（溪山处处皆廬む可き、靈隱飛來孤が最愛す）と有り、此の句で激賞された彼の「野外彫刻美術館」たる絶景の風流な名は、印度の高僧（後に靈鷲・靈隱兩寺の開祖）慧理が326年に訪れて来た時、天竺（中・日に於ける印度の古称）の靈鷲山との酷似に驚き、どう行って飛んで来たのかと訊いた事に由来している。日本に入った中国の夥しい言葉も域外からの「飛来峰」及び彫刻群の様な景色を呈するが、日本で其の儘で定着するか和風・「和色」（造語、日本的な色彩の意）に染まって変容し、更に其の一部が中国へ飛んで行ったことは、「飛来→飛去」の双方向交流に為ると言えよう。

「一動不如一静」の転義「多一事不如少一事」は、一事を余計にするより一事を控えた方が好いという勧めであり、「好事も無きに如かず」（出典＝『碧巖録』[中国宋代の圓悟克勤が、雪竇重顕の選んだ100則の頌古に垂示・評唱・著語を加えた伝書]の「好事不如無」）や、同じく『広辞苑』に有る熟語（和製）「触らぬ神は祟り無し」とも通じる。類似の「事勿主義」（『広辞苑』の見出し語＝「事勿れ主義」）は『日本国語大辞典』で、「(名) 問題や周囲との摩擦を避けて、ひたすら平穩無事を願う消極的な考え方」と説明されているが、出典（3点）中の「\*今年竹（1919—27）〈里見弴〉たちぎき・四」の「ことなかれ主義」も、2点目の「\*卍（1928—30）〈谷崎潤一郎〉二八」の「事勿れ主義」も、「事勿」（＝「(名) [形動] 平穩無事で、何の事件も起こらないようにの意。また、そのようなさま」）の唯一の出処「\*ブルジョア（1930）〈芹沢光治良〉四」の「事勿（コトナカ）れ」より早い。『広辞苑』で立項されない此の単語より「一主義」が先に出たのは興味深いが、中国語で「事勿主義」と同音・同声調の「事務主義」（shìwùzhǔyì）も否定的な意味である。『現代漢語詞典』の語釈は「沒有計劃，不分輕重、主次，不注意方針，政策和政治思想教育，而只埋頭於日常瑣碎事務的工作作風」（計画が無く、軽重・本末を弁えず、方針・政策と政治思想の教育に留意せず、只日常の瑣末な事務に没頭する仕事の流儀）と言うが、共産党が批判的として使って来た此の言葉は政治の要素の為に日本語には1語の対応が無い。両言語の間の転換で変形の度合が高く翻訳が難しい程、個々の言葉の特性や文化背景乃至物心両面の国情の違いが大きいわけである。『中国語大辞典』（大東文化大学中国語大辞典編纂室編、編集主幹香坂順一、角川書店、1994年）では、「日常の事務だけに没頭する仕事の気風。千篇一律のやり方。杓子と定規」と訳され、『東方中日辞典』（東方書店＋北京・商務印書館共同編集、相原茂・荒川清秀・大川完三郎主編、東方書店、2004年）では、「[名] 〈貶〉 事務一点張り。事務主義」という「貶義詞」（貶し詞）を示す訳に為っているが、何れも現代中国の独特の政治重視という要点を表し切れない日本語の限界が感じられる。原語

の4字の儘にした上で諸特徴の説明を附記した方が一番親切な訳し方かも知れないが、「注解」の字面通り理解へと導く注の必要性は外国語・異文化に接する場合には特に高い。

「事勿主義」は**両国共通の処世術**である故に中国語での対応は幾通りも有り、其の中の「不求有功, 但求無過」（功績を求めず、過誤無きを願うのみ）は「好事不如無」と似通う。同じ「事・無」を含む5字熟語には「無事<sup>これ</sup>是貴人」と「無事<sup>これ</sup>之（“是”とも）名馬」も有るが、中国の仏書『臨濟録』（唐の鎮州臨濟慧照禪師の法語集）に見える前者と同じく、其れに想を得て作家で馬主の菊池寛が競馬関係者の為に揮毫した後者も見事な逆説である。臨濟が衆に示して云った「無事是貴人」は下に「但莫造作, 祇是平常」（但造作する莫れ、<sup>ただ</sup>只是平常なれ）と続き、<sup>ただこれ</sup>作為で悟りを求めず自然体に徹した者こそが仏の教えを会得できる貴い人だという主張である。菊池寛は随筆「無事<sup>ふじこれいば</sup>之名馬」（日本競馬会機関誌『優駿』、1941年6月号、同じ頁の小見出しは「無事これ名馬」）で、「少しぐらゐ素質の秀でてゐるといふことより、常に無事であつてくれることが望ましい」と書き、実力が若干劣っていても故障無く常に活躍し続ける競走馬は名馬に該当すると説いている。<sup>5)</sup> 折しも<sup>うまだし</sup>午年に当る2014年の1月4日、安倍晋三首相は就任後3度目の「お国入り」で地元山口県長門市を訪れた際に、後援会主催の新年会で本年還暦に成る自身の干支に因んで、障害を力強く、ひらりと越えて行く駿馬の様に困難に挑んで行く決意を語った。<sup>6)</sup> 夜7時からのNHKテレビ報道番組「ニュース7」の此のトップ・ニュースの字幕は、「駿馬（しゅんめ）のように強く」の括弧付きの振り仮名<sup>キー・ワード</sup>で鍵詞の難読度を示しているが、支持者から健康と長期政権への祈願を込めた馬のブロンズが首相に贈られたことは、馬から強勢・疾走・跳躍・挑戦・進取を連想する**両国共通の観念の体現**に他ならない。同月29日に李克強総理は中共中央・国務院共催の春節団拜会（旧暦元旦祝賀会）で、「改革要“一馬当先”」（改革には「一馬当先」[率先して事に当る]が必要だ）と力説した。『週刊エコノミスト』（毎日新聞社）3月11日号の記事「消えた“リコノミクス” “深改”路線の大いなる不安」（金子秀敏 [毎日新聞専門編集委員]）では、「<sup>うま</sup>午年にちなんで“一馬当先”（全軍の先頭で突撃する馬となる）と改革推進の決意を披露している」と伝えた。<sup>7)</sup> 戦<sup>いくさ</sup>の見立ては狭義の嫌いが有る反面「先軍国家」朝鮮と類似した国情に合致する処も有り、日本語の「先頭・戦闘」の同音（中国語では其々違う xiāntóu, zhàndòu）の妙も感じる。誌名の「エコノミスト」は『広辞苑』で「経済学者。経済専門家」と定義されている（中国語では誌名の場合は「経済人」）が、直ぐ前の項「エコノミクス【economics】」の語釈「経済学」は中国語と同じである。12年12月に発足した安倍政権の経済政策は同年10月から「アベノミクス」と呼ばれて来たが、1980年代の「レーガノミクス」（米国のレーガン政権の自由主義経済政策）に因んで、「エコノミクス」と掛け合せて06年第1次安倍内閣の時に語られ始めた此の造語<sup>8)</sup>は、中国では「安倍経済学」と訳され「克強経済学」（日本語訳＝「リコノミクス」）の追随を誘発した。安倍と3ヵ月後に首相に就任した李の午年到来の際の馬に譬えた壮語は同工異曲の妙が有るが、2人の経済政策の通称

の構成要素を含む名の雑誌での「一馬当先」の上記記には引っ掛かる。「1匹の馬が先頭に当たる」の意の原語は動詞が名詞を修飾する構文に直されているが、同じ先駆精神の表現でも**中国語の動詞優位と日本語の名詞中心**との違いが見て取れる。『現代漢語詞典』の「一馬当先」の語釈は、「作戰時策馬衝鋒在前，形容領先或帶頭」（戦の時に鞭で馬を走らせて先頭で突撃する。先頭に立つことや引率することを形容して言う）であるが、「全軍の先頭で突撃する」の正しさを裏付けていながら力点は動詞及び関連の連用修飾語に在る。

此の4字熟語は『漢語大詞典』では、「策馬走在最前列。多形容領先，帶頭」（馬を御して最前列を行く。多く、先頭に立つことや引率することを形容して言う）と説明されている。初出典拠「『水滸伝』第九六回：“〔喬道清〕即便勒兵列陣，一馬当先，雷震等將簇擁左右。”」の様に、軍陣中の率先を表す場合でも突撃とは限らず寧ろ引率（和製漢語）の意味が原義に近い。次の「徐特立《記念“五四”对青年的希望》：“四十年前，我国青年一馬当先，向帝国主义和封建勢力展開了英勇的搏闘。”」は、唐突にも元末～明初の施耐庵しなゐんが著した長篇名作から6世紀も後の1959年の文献である。中国現代史の起点と為る「5.4運動」を記念し青年に対する希望を綴った此の文章の筆者は、毛沢東や田漢（国歌『義勇軍行進曲』を作詞した作家）の師として名高い教育家である。延安時代から党内「5老」（5人の高齢の革命家）の1員として長らく尊崇され続けた彼は、該博な学識や高潔な品格と共に毛と同じ湖南人らしい激越な性格を持ち合せていた。1907年（30歳）清朝の軟弱外交への義憤から自分の小指を切断し其の血で抗議文を書いた事は、此の文中の並列を表す助詞「和」の字面とは裏腹の「英勇」を体現した壮挙である。「英勇」は『現代漢語詞典』で「**形**勇敢出衆」（（形）抜きん出て勇敢な様）と説明され、「～殺敵 | ～的戦士」（「勇敢に敵を撲滅する」「英雄的な戦士」）という用例も有る。日本語では其の一定の使用頻度と対照的に『広辞苑』には入っておらず、『日本国語大辞典』の項の和文用例も「\*近世紀聞（1875—81）〈染崎延房〉三・三“特（すぐ）り切たる英勇（エイユウ）のみ僅かに五十人ばかり”」しか無い。語釈「《名》武術にすぐれていて、勇敢であること。また、その人。英武」は形容詞の機能を含まず、漢籍典拠「\*南史-梁武帝紀“爰命\_英勇\_、因\_機\_騁\_銳\_”」も『漢語大詞典』では、②「勇敢出衆的人」（抜きん出て勇敢な人）の出典（2点）の最初である（其の「《南史・梁紀上・武帝》：“公爰命英勇，因機騁銳。”」は篇章名等の表記が少し違う）。「①勇敢出衆」の4点中の初出『新五代史・楚世家・馬殷』は『南史』より数百年遅いが、名詞から派生した形容詞の意味は『現代漢語詞典』の唯一の語釈・用法に成っている。日本語では名詞としてのみ曾て存在し今や単語自体が死語と化してしま了ったが、『日本国語大辞典』で此の単語を挟む両側の「**贏**輸」（勝ち負け。勝負）と「**英雄**」は、義・字に見える「**英勇**」の**英雄主義・敢闘精神の本質**と此れを好む中国人気質を物語っている。

上記用例中の「英勇的」（英勇な）で修飾された「搏闘」は『現代漢語詞典』では、「**動**①徒手或用刀、棒等激烈地对打。②比喻激烈地闘争」（《動》①素手或いは刃物・棍棒等で激しく打



ち合う。②激しく闘争することの譬えに言う）の両義で、其々例文「用刺刀跟敵人〜」（銃剣で敵と白兵戦を交える）、「与暴風雪〜 | 新旧思想の大〜」（「暴風雨と格闘する」「新・旧思想の大激戦）が付いている。『広辞苑』の同項目は「互いにうちあうこと」の説明のみ有り、『日本国語大辞典』では語釈「〔名〕互いに打ち合つたたかうこと。組み打ちすること。格闘」と共に、『漢語大詞典』の初出典籍と同じ「\*新唐書-李載義伝“好与\_豪傑\_游、力挽疆搏闘”」が引いてあるが、唯一の和文用例「\*厭世詩家と女性（1892）〈北村透谷〉“好しや苦戦搏闘（ハクトウ）するととも、遂には弓折れ箭（や）尽くるの悲運を招くに至るこそ”」は、日本語に於ける晩生及び其の後の未熟を思わせ理由への探求の興味をそそる。「搏」を用いる日・中の単語の異同として「搏動・拍動」も挙げられるが、『広辞苑』には此の2語を見出し語とし「心臓の行う律動的な収縮運動」と定義する項が有り、『日本国語大辞典』では「拍動」と「搏動」は「搏闘」の下に別々の項目として隣り合い、前者は「臓器の律動的な収縮運動。周期的な現象が多い。主に内臓筋など自働性をもつ臓器に見られる。心臓拍動など」の意で、後者は「脈打つこと」の語釈に和文出処3点が付されている。最初の「\*形影夜話（1810）上“如、此搏動する脈、〔下略〕”」では動詞として使われたが、「\*即興詩人（1901）〈森鷗外訳〉蘇生祭“全羅馬の生活の脈は今此辻に搏動するかと思はる”」を経て、「\*蝗（1964）〈田村泰次郎〉“〔前略〕彼女の心臓はその搏動はやめたにちがいない”」では名詞の用法に成った。日本語の規則かのように動詞で始まる言葉も同辞書の此の項の品詞と為る名詞へと傾くわけであるが、此の和製漢語は『現代漢語詞典』では動詞と規定されている。語釈の「有節奏地跳動（多指心臓或血脈）」（<sup>リズム</sup>節奏を以て鼓動する [多く、心臓或いは血脈の律動を指す]）では動詞であり、例文の「心臓起搏器能模擬心臓的自然〜、改善病人的病情」（心臓ペース・メーカーは心臓の自然な搏動を模擬し、患者の症状を改善することが出来る）では名詞であるが、両品詞の併記をせず動詞を基本とする処が中国の辞書らしい。

「脈搏」の「**名**①心臓収縮時、由於輸出血液の衝擊引起的動脈の跳動。医生可根據脈搏來診斷疾病。②比喻社会、生活等發展、變化的情況或趨勢」（〔名〕①心臓が収縮する時、血液を送り出す衝擊に由つて引き起す動脈の搏動。医者は脈搏に拠つて病氣を診斷できる。②社会・生活等が發展・變化する狀況或いは趨勢に譬える）は、<sup>さすが</sup>流石に両義とも動詞ではあるまいが、挙例「時代的〜 | 把握生活的〜」（「時代の脈搏」「生活の脈搏を把握する」）の後者では動詞と連用している。学究的な『日本国語大辞典』では語源等に関する補助的な説明以外は用法を例示しないが、実用性の高い『広辞苑』では<sup>きよう</sup>然様の例は随處有り名詞の項に動詞との連用も好く提示されるが、中国の国語辞書は国民の平均的な習得度の相対的な低さに合せて実践の<sup>てびき</sup>手引の使命を負い、故に関連単語との連用の挙例乃至 <sup>センテンス</sup>文 単位の例文が多く施されている処に特徴が見られる。これは中国語の動詞優位・述語重視の傾向とは鶏と卵のとの間の様な相互因果関係も有ろうが、上記①の中の「動脈的跳動」（動脈の搏動）から「動脈・静脈」の対置概念を引

き合いに出すと、此の2つの和製漢語が含む「動・静」は其々中・日両言語の有り様の形容に適合し得よう。時代・生活に見立てる比喩的な意味や他動詞「把握」との連用を示す『現代漢語詞典』の「脈搏」に対して、『広辞苑』の「脈搏・脈拍」の項目は1義の語釈だけで、「心臓が律動的に血圧を押し出すことによって起こる動脈中の圧力の変動。その数は心臓拍動数に等しく、普通一分間に七〇ぐらい。病気その他によって数・強さ・規則性が変動するので、診断の指標となる。脈」と為っている。「医生可根拠脈搏来診断疾病」（「可」は可能を表す助動詞、「根拠」「診断」は動詞）と「診断の指標となる」は、**中国的な人間主導の「為す→出来る」型**と**日本的な状態主体の「なる→である」型の発想**を窺わせる。

『日本国語大辞典』では何故か「拍動」と「搏動」の様な別項化をせず、日本語ならではの「脈搏・脈拍」併記の見出し語を用いる（中国語では其々 bó, pāi と読む「搏」「拍」は一緒に成るわけが無いし、和製漢語「拍動」「脈拍」は元々入っていない）が、語釈は（『名』心臓の拍動につれて起こる動脈内の圧力変動が末梢動脈に伝わったもの。成人で、一分間に六〇～七〇回打つのが標準。比喩的にも用いる。パルス。プルス。脈）で、俱に「搏」と書く和文用例（3点）の初出「\*七新薬（1862）六“脈搏は毫も変することなく、〔下略〕”」も、次の「\*晝鐘（1901）〈土井晩翠〉万里長城の歌“嗚呼‘永劫の脈搏’はいづれの時か絶果てむ”」（原文の「嗚呼『永劫の脈搏』〔下略〕」の中の引用符『』は、此处で「」が「」中の“ ”と変った為‘ ’に変更）も、『現代漢語詞典』の①②に当る即物的、比喩的な意味とも中国語での出現より早い（『漢語大詞典』の①「動脈の搏動。〔下略〕〔的=の〕」と②「借喩一種動態或情態」〔転じて、ある動態或いは情態を指す〕の出典〔2点、3点〕中、其々の初出「洪深《戲的念調与詩的朗誦》」と「聞一多《可怕的冷靜》」は、文献の成立年代を記さない同辞書の方針に因り未詳の儘であるが、両者の生年〔1894、99年〕を見ても和文使用例の先行が判る）。身体に関する和製漢語は中国語では社会・生活等に譬える語義が日本語以上に発達して来たが、「天下之本在国、国之本在家、家之本在身」（天下の本は国に在り、国の本は家に在り、家の本は身に在る）という『孟子・離婁章句上』の命題に即して言えば、**中国的な「人本主義」乃至「身本主義」（造語）の遺伝子も何処と無く感じられて来る。**

『日本国語大辞典』の「脈搏」の1分間の通常回数に関する記述は、年齢層と数値の幅俱に『広辞苑』より詳細で専門性が高い様な印象を与えるが、日本人間ドック学会等が2014年4月に中間発表した健康診断の新たな基準値と各専門学会の規定との差に見られる様に、**権威有る専門機構の間にも権威有る国語辞書の場合と同じく見解の相違が間々有る**。今回の策定で特に話題に成ったのは血圧の正常値範囲が147/94に引き上げられ事であるが、『広辞苑』の「高血圧症」の語釈では最も権威有る世界保健機関の規定を援引して、「WHOの基準では収縮期水銀柱140<sup>ミリメートル</sup>以上、または拡張期血圧90<sup>ミリメートル</sup>以上」と述べている。『現代漢語詞典』では「高血圧」の語釈は、「成人的動脈血圧持続超過18.7/12千帕（140/90毫米汞柱）時叫作高血圧」（成

言語・辞書の「鏡」に見る日本・中国の国情・心性・文化の諸相と異同（序説1）（夏）

人の動脈血圧が持続的に<sup>キロ・パスカル</sup>18.7/12kPa [140/90mm 水銀柱] を超えている状態を高血圧と言う）と定義している。『広辞苑』の「腎性・内分泌性など原因疾患の明らかなものと、本態性高血圧とがある」に対して、「症状性高血圧」と「原発性高血圧」に分類し通常後者を「高血圧病」と称すと説明している。『日本国語大辞典』では「高血圧病」を別項に立てない『現代漢語詞典』と違って、「高血圧」（語釈＝「《名》“こうけつあつしょう [高血圧症] ”に同じ）の次に「高血圧症」の項が有る。定義中の「個人差もあり、明確な境界があるわけではないが、臨床的には、最高血圧一四〇～一五九以上、最低血圧は九〇～九九以上をいう」は、国際基準を踏まえつつ柔軟性を持ち刊行後10年余り経った直近の上記緩和にも対応できる。「高血圧」の挙例（2点）では「\*大增補改訂や、此は便利だ（1936）〈下中彌三郎〉」が初出と為るが、『広辞苑』で立項されない此の単語と同じ和製漢語の「高血圧症」は使用例が無く、中国語の「高血圧」「高血圧病」と同じく初出が未詳の儘である。

現代人を悩ませる此の病<sup>やまい</sup>は『広辞苑』第5版までは「成人病」の項で挙げられていたが、今は同版で空見出しとして新設された「生活習慣病」に主項目を譲っている。其の語釈「動脈硬化・高血圧・悪性腫瘍・糖尿病・肺気腫や骨の退行性変化など、若い時からの生活習慣が原因で壮年期以後好発する病気の総称」の後に、空見出しに変わった「成人病」も付されているが、『漢語大詞典』は勿論『現代漢語詞典』にも無い此の2語は『日本国語大辞典』で同居している。第1版（日本大辞典刊行会編、全20巻、小学館、1972—76年刊）から採録された「成人病」は最新版では、「《名》中年以後にその発病が多い病気の総称。動脈硬化、高血圧、癌腫、心筋梗塞、肺気腫、糖尿病、白内障、前立腺肥大、変形性関節症などがある」と説明され、→で参照を指示した「生活習慣病」の項目は、「《名》不適切な食事、喫煙、飲酒などの生活習慣が原因と考えられる病気。従来成人病と呼ばれてきた脳卒中、心臓病、がん、糖尿病などに、高脂血症、歯周病などを加えたもの。平成八年（一九九六）、厚生省がこの呼称を導入した」と為っている。前者の唯一の出典「\*結婚（1967）〈三浦哲郎〉七“まだ遙か遙かと思っていたそんな成人病の地雷原に、いつのまにか自分たちも迷いこんでいるようだ”」は、使用例が無い後者の出現との約30年の時期差<sup>タイム・ラグ</sup>（「時差」に因んだ表記）を示しているが、語釈中の「癌→がん」の表記の変化や病名挙例の増減も社会生活の年輪を感じさせる。国語辞書から世相を読み取るのは後写鏡<sup>バック・ミラー</sup>（中国語＝「後視鏡」）で後方を観るのに似ているが、時流を汲み取り世人の需要<sup>ニーズ</sup>に応じて進化を重ねて行く辞書も自動車の走行等と同様に、中国流で言う「与时俱进」（時代<sup>とも</sup>と俱に進む）の姿勢・能力が欠かせない。

此の成語の祖形「与日俱进」は〔宋〕李昉『太平広記・魏夫人』引『集仙集』に見え、月単位をも用いる類義語「日新月異」以上の日増しに前進・向上することを形容する。『現代漢語詞典』では馴染が薄い「与日俱进」の代りに「与日俱増」の項目が有り、「隨着時間的推移而不斷增長」（時間の推移と伴<sup>とも</sup>に絶えず増長する）と説明されている。『漢語大詞典』では「毛涿

東《上海太原失陥以後抗日戦争的形勢和任務》が唯一つの出処と為るが、[宋] 呂祖謙『呂東萊集・為梁参政作乞解罷解政事表二首』を初出とするのが通説である（劉万国・候文富主編『中華成語辭海 [修訂版]』、全2巻、吉林大学出版社、1996年。上記「与日俱進」及び類義語「与日俱積」[初出＝「宋・陳亮《与章德茂侍郎》」]も、別に空見出しが有りながら挙例は此の項に在る）。最古の用例が数えられなかったのは「忘祖典」（祖形と成る出典を忘れる）とも言えようが、此の揶揄の諧謔語が依拠した成語「数典忘祖」は『現代漢語詞典』で斯う詳解されている。「春秋時晋国的籍談出使周朝，他回答周王的问题時没有回答好，事後周王諷刺他“数典而忘其祖”，意思是籍談說起国家的礼制掌故来，把自己祖先的職守（掌管国家的史冊）都忘掉了（見於《左伝・昭公十五年》）。後來用“数典忘祖”泛指忘掉自己本来的情况或事物的本源。」（春秋時代に晋国の籍談が周に使いした時、周の質問に上手く答えられず、後に周の王は彼を「典を数えて祖を忘る」と諷刺した。籍談は国家の礼法・礼式の制度や掌故を語る際に、自分の先祖の職務〔国家の史冊を掌管すること〕を忘れてしまった、という意味である〔『左伝・昭公十五年』に見える〕。後に「数典忘祖」で広く自分の本来の状況や物事の本源を忘れることを指す。）

語釈中の「礼制」は同辞書には項目が無いが、『漢語大辞典』では「礼儀制度；国家規定的礼法」（礼儀の制度。国家が規定した礼法）と解釈され、『礼記・楽記』及び孔穎達疏等の出典が5点付されている。『日本国語大辞典』では語釈「(名) 礼法・礼式の制度。礼儀のきまり」と、漢籍「\*礼記－楽記」の同じ典拠及び「\*三代実録－元慶元年（877）二月一四日」等の使用例3点があるが、「\*東京新繁昌記（1874—76）〈服部誠一〉初・学校」まで使われた此の語は『広辞苑』にはもう無い。中国から礼法や政治等の制度を吸収した日本の国家形成の過程に照らせば、一種の「祖形離れ」（「親離れ」に因んだ造語。「祖」は大昔の日本人及び師と成った中国文化）と思われるが、中国で儒教の類義語として使われて来た「礼教」が日本語に入っていないのも訝れる。此の概念は『現代漢語詞典』では、「名 礼儀教化，特指旧伝統中東縛人的思想行動的礼節和道德」（(名) 礼儀の強化。特に古い伝統の中で人の思想・行動を束縛する礼節と道德を指す）と定義されており、語釈が「礼儀教化」と為る『漢語大詞典』では『孔子家語・賢君』等5点の出典が引いてある。中国で今も準常用語であることは古い伝統と其れに反対する意識の強さの証と見做せるが、日本は同じ漢字・儒教文化圏内の中国の「名教文化」と距離を保とうとするかの如く、共に「礼儀之<sup>の</sup>国」でありながら「礼教」の名を拒み中国「文」の日本「化」を図って来た。「礼制」と並ぶ「掌故」は『現代漢語詞典』では、「名 歴史上の人物事迹、制度沿革等」（(名) 歴史上の人物の事跡、制度の沿革等）と説明され、「文壇～」（文壇の故事）の挙例が付いているが、『広辞苑』では「①中国漢代、礼楽の故事をつかさどった官。②国家の故事慣例。典章制度。故実」の両義から成り、『日本国語大辞典』では類似の①と国家の要素が無い「②しきたり。故事。故実」には、其々漢籍「\*司馬相如－封禪文」と「\*史

記-亀索伝)の典拠が引かれている。『日本国語大辞典』にも無い次の「職守」は「**[名]**工作崗位」((名)仕事の持場)の意で、『現代漢語詞典』の此の語釈に次ぐ挙例「擅離~|忠於~」(勝手に持場を離れる)「職責を忠実に果す」は、日本語の不導入と対照的な使用頻度の高さを示している。

「職守」の説明中の「掌管」は「**[動]**負責管理。主持」((動)司り管理する。仕切る)の意で、「各項事務都有專人~」(各種の事務は其々専門の人が責任を以て取り扱う)の用例も有る。『広辞苑』の「つかさどり管理すること。取り扱うこと。管掌」は同義であるが、用例「“政府—」が付く和製漢語「管掌」の「①つかさどること」より使用頻度が低い。『日本国語大辞典』では名詞と為る「掌管」は漢籍典拠が無く、「\*西国立志編(1870—71)〈中村正直訳〉八・二一」等2点の和文用例のみが有るが、「掌握管理」と定義する『漢語大詞典』の同項目では、「元高文秀《襄陽会》第一折」を初めとする出処が4点挙げられている。『広辞苑』の「管掌②」(=「旧制で、市町村などに故障のある時、監督官庁が官吏を派遣してその職務を執行すること」)は、『日本国語大辞典』では「\*市制及町村制(明治二一年)(1888)市制・五〇条」が唯一の出典と為り、①の唯一の用例「健康保険法(大正一一年)(1922)七・一」は其の後なので、中国語を輸入した後に反転の形で和製語義を生み出し原形を傍流に追い遣る過程が面白い。「掌管」の目的語「史冊」も同辞書には項目が有り、語釈は「(《名》書物。特に、歴史を記したもの。史籍」で、漢籍典拠「\*李康-運命論“善惡書\_於史冊\_、毀譽流\_于千載\_”」の他に、「\*日本詩史(1771)一」~「\*自由之理(1872)〈中村正直訳〉二」の使用例が4点有るが、明治初期まで使われていた此の単語は『広辞苑』では立項されていない。語釈中の「書物」や3点目『西国立志編・一・八』の中の「史冊(〈注〉ショモツ)」から、意味上の相違に由る準和製漢語「書物」や中国語由来の「史籍」に取って代えられたと推測される(『現代漢語詞典』に無い「書物」は『漢語大詞典』では、「指書籍和跟書籍有関的物品」[書籍及び書籍と関連する物品を指す]の意で、1点だけ『後漢書・独行伝・戴封』の典拠が有る)。『現代漢語詞典』では「**[名]**歴史記録」と定義された此の単語は対照的に、「名垂~|載入~」(「歴史に名を残す」「歴史に記載される」)と挙例が2点も付き、語釈の最後の「也作史策」(「史策」にも作る)で提示された同義語は、「同“史冊”」(「史冊」に同じ)と説明する空見出しが設けられている。上記の「善惡書\_於史冊\_、毀譽流\_于千載\_」は「於」と簡体字「于」との不統一が気懸りであるが、中国的な「史冊・千載」の対は『広辞苑』の不載録に見られる両言語の断層を思わせる。

「数典忘祖」の故事に出た「国家的史冊」(国家の歴史記録)を借りて名付けるならば、**国語辞典は国語の「史冊」であり其の編纂者は国語の歴史記録の掌管者である**と言えよう。「与日俱増」の語源を宋代まで遡せせず現代の毛沢東の演説(1937年11月12日)を唯一の例に挙げたのは、毛の「現代の秦の始皇帝(中国語=“秦始皇”)」の悪評に語呂合せ(同=「諧音」)で因んで、**長年の暴政・洗脳に由る歴史・文化の伝統の喪失と編者の「真の思考停止」**を感じ

させる。1958年5月8日、毛沢東は中共第8回全国代表大会第2回会議で発言した際に、秦の始皇帝の焚書坑儒<sup>ぶんしよこうじゆ</sup>は僅か468人殺したが、我々は「鎮反」（建国初めに大量処刑を敢行した「鎮圧反革命運動」〔反革命分子を鎮圧する運動〕）で、反革命の知識人等を4万6千人ぐらいは殺したから100倍も凄い、と豪語して憚らなかつた。「焚書坑儒」は『現代漢語詞典』では、「指秦始皇為巩固統治而焚燒古代典籍、坑殺方士儒生的事件」（秦の始皇帝が統治を強化する為に古代の典籍を焼却し、方士・儒生を坑殺した事件を指す）と説明されているが、『広辞苑』の語釈は「前二一三年、秦の始皇帝が民間に蔵する意識・卜筮<sup>はく</sup>・農業などの実用書以外の書をすべて集めて焼き捨て、数百人の儒者を捕らえて、翌年咸陽<sup>かんやう</sup>で坑<sup>くわう</sup>に埋めて殺したこと」で、『日本国語大辞典』では更に詳しく、「中国秦の始皇帝が前二一三～二二年に行なった、主として儒家に対する言論統制政策。法家の思想家であった宰相の李斯の建言により、医薬・卜筮・農事などの実用書以外を焼き、儒生を捕えて、四六〇余人を咸陽で坑殺したといわれる事件。転じて、学問・思想を弾圧すること」と言う。其の漢籍典拠「\*孔安国-古文尚書序一“及<sub>レ</sub>秦始皇滅<sub>レ</sub>先代典籍、焚<sub>レ</sub>書坑<sub>レ</sub>儒天下学士、逃<sub>レ</sub>難解散”」は、「亦作“焚典坑儒”」（亦「焚典坑儒」に作る）とする『漢語大詞典』の同項目では、『史記・秦始皇本紀』に拠る詳解の後の典拠（「焚典坑儒」の方を含む4点）の初出である（「《尚書》序：“秦始皇滅先代典籍，焚書坑儒，天下学士逃難解散。”」の中の区切り方が微妙に違う）。4点の次に「亦省作“焚坑”」（亦略して「焚坑」に作る）という説明が有り、「唐李商隱《贈送前劉五經映三十四韻》」等2点の用例が示されているが、「焼・殺」の2要素で合成した略語に対して日本語の略語「焚書」は殺害の方を省いている。

『広辞苑』で子見出し「一坑儒」の親項目と為る「焚書」は、「書籍を焼きすてること。学問・言論を圧迫する手段として行われた」と過去形で述べている。『日本国語大辞典』の語釈は「《名》学問や言論圧迫の手段として書籍を焼きすてること。→焚書坑儒」で、漢籍典拠「\*史記-儒林伝“及<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>秦焚書、書散亡益多”」の前に在る唯一の用例は、西洋を題材にした「\*フランスの百科辞典について（1950）〈渡辺一夫〉五」である。『現代漢語詞典』に無い此の単語は『漢語大詞典』では、「①焼毀書籍。多指秦之焚書。②指秦始皇焚毀的书」（①書籍を焼却する。多く、秦の書物焼却を指す。②秦の始皇帝が焼却した書物を指す）の両義から成り、①の挙例（3点）の初出は上記と同様で（『史記・儒林列伝』の篇名は1字多い）、②の唯一の出処は「唐元稹《贈鄭餘慶太保制》」である。②で参照を指示した「焚書坑儒」の項と同じく語釈には始皇帝や言論弾圧への批判が無いが、統治強化の目的に対する『現代漢語詞典』の強調は古今の独裁強権への容認さえ感じられる。本論考の冒頭で毛沢東に由る「胡風反革命集団」の摘発（1955年）を取り上げているが、20世紀中国最大の此の「文字獄」（言論弾圧の冤罪事件）は正に現代の「焚書坑儒」である。『広辞苑』では「文字の獄<sup>もんじのこく</sup>」は「中国の諸王朝、特に清代に起こった数々の筆禍事件の総称。異民族出身の清朝は政治に批判的な言辞を筆にした漢人を

弾圧、大量に処刑。康熙・雍正・乾隆年間（二乾隆）に甚だしかった」と説明され、『現代漢語詞典』の「文字獄」の語釈は「**名**指旧時統治者故意従作者的詩文中摘取字句，羅織罪状所造成的冤獄」（《名》昔の統治者が作者の詩文の中から故意に字句を槍玉に上げ、罪状を捏造して作り上げた冤罪）である。其々辛亥革命（1911年）或いは中華人民共和国成立（49年）までの現象とされているが、20世紀後半の中国でも一再ならず起きて了しま中々根絶したと断言し難い状況が続いた。

『広辞苑』に於ける別項の「焚書」は、「明末の儒者李贄りの著。六卷。童心説などで伝統的な名教の権威を批判。異端の書として禁圧。『続李贄』もある」の意である。『日本国語大辞典』では此の項は無く代りに上記の「焚書」の次に「憤書」が有り、語釈「《名》いきどおりを表わした文書。抗議文」と、「\*近世紀聞（1875—81）〈染崎延房〉五・三」の使用例（1点のみ）から成る。中国語でも「焚」「憤」は同音（fen）で声調順（第2声、第4声）も「焚」→「憤」と為るが、此の2字は焚書坑儒の悪行・悪名を表せるので**両国共通の漢字の音・義の妙**が改めて味わえる。「憤書」が同辞書に死蔵されていることは同じ和製漢語の「死蔵」に目を向かせるが、『広辞苑』の当該項目では「活用しないでしまいこんでおく。退蔵」と説明し、「名品を一に任せる」という活用の挙例を付けている。同辞書では「憤書」は「退蔵」（＝「隠して所持すること。―物資」）にも成らず、死語扱いで所蔵語彙群から退かせているが、「死・蔵」の義・字は巡り巡って「李贄」の項の次の詳解に現れている。「明末の儒者。陽明学左派。字は卓吾。福建晋江の人。自ら儒教叛徒と称す。一五八〇年官吏を辞し、やがて剃髪し在家居士として世俗の交わりを絶ち、著述に専心。過激な言説によって異端視され七六歳で下獄、自殺。吉田松陰が獄中でその著書を愛読、抄写した。著『焚書』『蔵書』など。（二焚書）」其の前の「李詩」の項（＝「唐の李白の詩」）の前の「李斯」は、同じ「焚書」の関連人物として日本語の同音で奇しくも至近距離に位置している（中国語では「贄」はzhì、「斯」はsī）。「李斯」は「秦の宰相。楚の上蔡の人。荀子に学び、始皇帝に仕え、宰相となり、焚書を行なった。最後は讒なせられて刑死。（前二一〇）」と紹介されているが、言論封殺の建議者がやがて嫌疑を掛けられ君主に殺されたのは中国政治の残酷さの証である。鄧小平が日本の外務事務次官に「雲の上の人」と評されたのは焚書提言のちようど恰度2200年後に当るが、其の年頭の胡耀邦総書記の事実上の更迭と「反資産階級自由化」キャンペーン運動も厳しい粛清である。『日本国語大辞典』の「焚書坑儒」の使用例（2点）の初出は「\*史記抄（1477）一六・儒林列伝“始皇、焚書坑儒せられて掃地尽矣”」であるが、次の「\*戯作三昧（1917）〈芥川龍之介〉一二“焚書坑儒が昔だけあったと思ふと、大きに違ひます”」は不吉な預言に思えて来る。始皇帝の中国統一の2200周年に当る1979年は鄧の推進に由る「改革・開放元年」であるが、焚書政策発足の翌年の「坑儒」と李斯処刑の其々2200年後の1988、90年の間に、学生・民衆への武力鎮圧と趙紫陽総書記に対する「政治的な処刑」（解任・軟禁）が行われた。高血圧の話題から「血高圧」（造語、流血を辞さない高

圧政策の意)へと連想が飛んで行き、「高圧血」(同、其れに由る流血の意)の禁域(中国語＝「禁区」)に立ち入って<sup>しま</sup>了ったが、時代・生活の脈搏を掴む手段と為り得る国語辞書の隠然たる魔力の誘発の所産でもあろう。

2014年6月4日校了

#### 注釈

- 1) 『小林秀雄全作品10 中原中也』(新潮社、2003年)所収(176—186頁)。振り仮名は原文の儘(他の引用文も原則的に同様)。
- 2) 同書361—362頁。
- 3) 「中国の大快楽主義」は井波律子の著書(作品社、1998年)の題。「物量主義」は其の『酒池肉林 中国の贅沢三昧』(講談社現代新書、93年)の命題(14頁)。「欲望の自己増殖」は同書第4章「商人の贅沢」の小見出し(90頁)。
- 4) 矢吹晋「日中誤解は“迷惑”に始まる——国交正常化30周年前夜の小考」(日中コミュニケーション研究会・北京シンポジウム報告、2001年11月23日)等而言及された此の齟齬は、真相の解明が<sup>なお</sup>尚有力な証言を待つ状態である。
- 5) 同号18—19頁。
- 6) 安倍発言は報道機関に由って微妙に異なるが、本稿では翌5日『読売新聞』の記事「首相選歴の年 “駿馬のように” 地元・山口で決意」に拠る。
- 7) 同号31頁。
- 8) 「アベノミクス」、「トクする日本語」(「NHKオンライン—NHKアナウンスルール」内のウェブ・サイト)2013年4月17日掲載。

(夏 剛, 立命館大学国際関係学部教授)



## 由语言及辞典之“镜”所见中、日 国情、心性、文化之百态与异同（导言1）

作为笔者研究多年的中、日两国语言、文化、社会等方面之比较的一环，本系列论考以两国的权威性语文词典、综合辞典之释义、举例、探源、补注等为切入点，尝试通过分析词语的收录情况、使用频度、发展演变来发现深层传统及时代精神，并结合语言研究、文化比较展开社会观察、时事评论乃至涉及国际关系的政治议论。因采用“意识流”风格表述连锁式开掘的形式、结构不免显得奇异而特加导言予以说明，导言本身在解释动机、方法及提示思绪、目标的过程中又以漫游、纵论而自成长篇论说。

本部分基于语文对人形成思想、感情的重要性和辞典堪称“终生为师”的特殊地位，指明辞典寓知识、原理于其中的广博、深奥及兼具共性、个性，透过编者的价值取向和处理手法读解历史背景、社会时尚、文化潮流。在留意中国辞典多属“准官办”而有别于日本词典“纯民办”的基础上，从各种角度阐发两国语言在辞典中所显现出或隐现着的形形色色的相生相克、亦同亦异。其一例为注意到形、义皆同并有双重词性的单词往往在中、日辞典里分别定为动词和名词，由此推论汉语爱高调凸现人为意志而日语多淡然归至静态结果。

本论考注目中国的“政·商”特长和日本的“工匠气质”在辞书编纂及社会生活中的表现，将其权威性语文、综合辞书视为不乏“代言传媒”性质的“国家文化名片”加以审视。导言先以客观立场及批判精神检验、点评两国的各两部规模最大或知名度最高的语文辞典，实事求是地从多处例证中提取各自特点、衡量彼此长短并上升到民族文化、国家特征的层面。本部分特色之一是与政治性强、贴近现实的中国辞书相对应的“长征”迂回及“借镜”折射，借辞书映出古今中国的言路、思路、心路诸相并照到日本的相应情状及二者的相关、相违。

（Ka Go, 立命馆大学国际关系学院教授）

